

# 第7回 認知文法研究会

日にち:2017年3月15日(水)

会場:大阪大学豊中キャンパス (<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/access/accessmap.html>)

言語文化研究科2階大会議室(<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/access/toyonaka/toyonaka.html>)

[(小さな会なので)立て看板も掲示もありません。自力で来てください。]

## プログラム

11:00 挨拶

11:10 第一発表(論文レビュー):貝森有祐(東京大学[院])

「構文現象の統合的理解に向けてー認知文法から見る動詞と構文ー」

節の意味と構造は何が決定しているのか。この問題に対して、動詞が決定しているとする立場と、構文が決定しているとする立場があり、今なお様々な理論的枠組みにおいて盛んに議論されている。本発表では、動詞と構文は不可分の関係にあるという観点から両者の中間的立場を採る Langacker(2009)の議論をまとめ、さらに他の理論的枠組みと比較することを通して、Langacker の立場が実際の言語分析に際してどのような意義を持つのか考えてみたい。(なお、本発表は論文のレビューです。各自、事前に下記の論文を入手し、読んでください。入手困難な場合には、世話役まで。Langacker, Ronald W. 2009. 'Constructions and Constructional Meaning.' In Vyvyan Evans and Stephanie Pourcel (eds.) *New Directions in Cognitive Linguistics*. 225-267. Amsterdam: John Benjamins.)

13:30 第二発表:中嶋浩貴(日本学術振興会特別研究員・神戸大学[院])

「認知文法とフレーム意味論ー品詞の有意味性をめぐってー」

認知文法における特徴的な議論のひとつに品詞の有意味性に関するものがある。従来品詞は形式的分布の観点から定義されてきたのに対し、ラネカーは特定のプロフィールを有するものとして品詞も意味的な特徴付けが可能であると主張している。本研究ではフレーム意味論および FrameNet の枠組みに基づき、realization の観点から品詞の有意味性について経験的に検証する。

14:40 第三発表:楊明(関西学院大学)

「認知文法の枠組みにおける日中対照研究の可能性ー日中の二重主語構文を中心にー」

本発表は、認知文法の枠組みに基づき、日本語[NP1-ga-NP2-ga-VP]と中国語の二重主語構文[NP1-NP2-VP]に関する対照研究に向けて基礎となる概念の整理を行うものである。格標示がない中国語は topic prominent な言語であるため、中国語の二重主語構文は話題構文と密接な関係にある。一方、Kumashiro(2016)によると、日本語の二重主語構文は、[NP2-VP]の概念的な自立性の度合いにより、bi-clausal double-nominative construction と mono-clausal double-nominative construction に分類することができる。このような日本語と中国語の特徴に基づいて、本研究では、両言語の二重主語構文の意味構造の差異について考察する。

15:50 第四発表:田村幸誠(大阪大学)

「見えないセンターラインと空間認知表現」

本発表では、Diessel (2003; 2006) 及び Tamura (2014) らの研究を背景に、通言語的にみた指示代名詞の意味的多様性、特に、implicit に想定される landmark の複雑性ということについて議論してみたいと考える。英語などの言語をモデルとした直示表現の分析では扱いきれない絶対指示と相対指示の連続性の問題などをユピック・エスキモー語などを参考にしながらみなさんと議論できたらと考えています。

16:50 茶話会

※ なお、準備の関係上参加者の人数を把握しておく必要があります。当日参加も可能ですが、参加希望の方はなるべく事前に世話役までご連絡ください。

連絡先(世話役)

広島大学大学院総合科学研究科 町田 章

akimachida(at)hiroshima-u.ac.jp